

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720245

研究課題名(和文) 否定極性表現における構成的意味

研究課題名(英文) Compositional meaning of negative polarity items

研究代表者

中西 公子 (NAKANISHI, Kimiko)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：30598751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、英語、日本語、ドイツ語の否定極性表現(「誰も/anyone」などのように主に否定文でのみ用いられる表現)及び意外性と累加の表現(「も/even, also」などの表現)を用いて、「ある言語表現の全体の意味がその表現を構成する部分の意味とどのように関わっているのか」を解明した。具体的には、いくつかの語の組み合わせから成る否定極性表現(「誰」+「も」など)と、それ以上小さな語に分けることが出来ない否定極性表現(anyoneなど)を比較し、語の意味が文全体の意味に与える影響を検討した。その際、上記3言語を比較することで、部分の意味と全体の意味の関係の普遍的性質を明確にした。

研究成果の概要(英文)：This research program advanced the understanding of "how the meaning of a complex expression is determined by the meaning of its parts" by examining the semantics of negative polarity items (NPIs such as 'anyone') and additive particles (such as 'even/also') in English, Japanese, and German. Specifically, the program compared decomposable NPIs (such as Japanese 'dare-mo') with NPIs that have no parent parts (such as English 'anyone'). By comparing three languages above, the program

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：意味論 否定極性表現 普遍性

### 1. 研究開始当初の背景

形式意味論の中核を成す原理に、「ある表現の全体の意味は、その表現を構成する部分の意味とそれらの部分の結合様式によって決定される」という構成性の原理がある。この原理はどの言語にも普遍的に当てはまるとされているが、何が部分と見なされるかの明記がないため、言語間で差が生じる可能性がある。例えば、ある言語の「それ以上小さな語に分けることができない非構成的な言語表現」が、別の言語の「いくつかの語の組み合わせから成る構成的な言語表現」に、分布や意味の面で対応する場合、前述の言語にも構成的分析を適用するべきかという問題が生じる。

### 2. 研究の目的

研究代表者は、これまでに様々な言語の「分離構文」(日本語の数詞遊離構文、ドイツ語の量化詞分離構文など)を用いてこの問題に取り組んできた。本研究では、この取り組みを否定極性表現 (negative polarity item (NPI))にまで広げ、上記の構成性の原理の普遍的性質をより明確にすることを目指した。

具体的には、「構成的な NPI の構成部分の意味はどの言語でも同じなのか」「any のように構成部分を持たない NPI はどのように分析するべきか」という2つの研究課題に取り組んだ。その際、英語、日本語、ドイツ語の3言語の比較を行うことで、上記の構成性の原理の普遍的性質をより明確にすることを目指した。

NPI とは、否定を中心とする特定の環境でのみ認可される表現で、*any* や *ever* がその例として挙げられる (*Joe didn't see any men* vs. *\*Joe saw any men*)。1960年代より NPI に関する多大な研究が行われてきたが、近年は NPI の分布にはなぜ制約があるのかを問う研究が盛んである。中でも重要なのは、NPI の分布の制約は NPI の語彙的意味にあるとする Lahiri (1998) の研究である。ヒンディー語の NPI *ek bhii* の分布の制約は *ek* (= *one*) と *bhii* (= *even*) の意味から構成的に導き出せるいうもので、NPI の語彙的意味と分布の制約に必然的な関係があることを明確にした。しかし、他言語の NPI を視野に入れた場合、解決されるべき多くの問題が残されている。以上を踏まえ、本研究課題では、ヒンディー語と比較しつつ、英語、日本語、ドイツ語の NPI の分析を試みた。また、NPI の分析を意外性と累加の表現にまで拡張することで、構成性の原理の本質を探ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究課題では、英語、日本語、ドイツ語の NPI 及び意外性と累加の表現の研究を3年間の計画で行った。「構成的な NPI の構成部分

の意味はどの言語でも同じなのか」「*any* のように構成部分を持たない NPI はどのように分析するべきか」という設問に答えるため、「構成的な NPI の語彙的意味」「構成的な NPI と非構成的な NPI の比較」という2つの問題に取り組んだ。

1年目は基礎研究期間と位置付け、上述3言語のデータの記述的研究を中心に行った。先行文献のデータの収集と整理に加え、必要に応じて新しいデータを補った。2年目は1年目で得られたデータに基づく理論的研究に重点を置いた。3言語の包括的比較研究を行うことで、先行研究とは異なる発見を目指した。最終年の3年目は、前2年間で得られた成果をより広い理論的視野から検討し本研究課題を総括した。

具体的には、1年目には研究に必要なデータの収集と整理を重点的に行った。英語、日本語、ドイツ語の NPI のデータに加えて、意外性と累加の表現のデータも扱った。上述3言語のデータを比較することは理論的に見て重要である。英語は *any* のような非構成的な NPI を有し、一方で日本語は「誰も」のような構成的な NPI を有している。また、ドイツ語は意外性の *even* に対応する表現として構成的な *auch nur* (*auch* 'also', *nur* 'only') を有している。このように、3言語の NPI 及び意外性の表現は、構成性に関して他言語とは異なる特徴を持っており、「構成性の普遍的性質を解明する」という本研究の目的を遂行する上で3言語の比較研究を行うことは重要である。本研究の対象言語として上述3言語を選択したのは、理論的な理由のみならず実用的な理由もある。研究代表者は日本語が母語であり、英語とドイツ語に関する研究を長年行っているため、上述3言語のデータの収集及び整理には困難はない。また、3言語の NPI 及び意外性と累加の表現に関しては多数の先行研究がある。文献に出てくるデータを包括的に収集及び整理し、さらに提示されている分析を検討する作業を通じて、本研究の独創性を拓いた。先行研究におけるデータの整合性を見極め、データの欠落や矛盾が見られる場合は、対象言語の話者から聞き取り調査を行うことで、随時新しいデータを補った。上述3言語はそれぞれ話者数が多く、また3言語を母語に持つ言語学者数も多いことから、新しいデータの収集は比較的簡単に行えた。以上の理論的及び実用的理由により本研究を上述3言語に限定することで、限られた時間内で個別言語の理解と言語の普遍的特徴の検討のどちらも行うことができた。

今後、言語の普遍的性質を探求するには、さらに多くの言語、とりわけ、日本語とゲルマン語 (英語、ドイツ語) 以外の言語の研究が重要である。3年間という限られた研究期間では、対象とする言語数を限定する必要があったが、今後の研究で対象言語を拡張する予定である。

2年目には、前年度に得られたデータに基づいて理論的考察を行うことに重点を置いた。日本語の NPI、さらに英語とドイツ語の意外性の表現に関しては、研究代表者はこれまでも研究を行ってきた。しかし、これまでの研究は、ドイツ語のみに基づくものと日本語と英語の比較に基づくものであった。本研究では、3言語の包括的比較研究を行うことで、言語の普遍性に関する新しい発見ができた。

最終年には、前年度に引き続き理論的研究を重点的に行った。前2年間で得られた成果をより広い理論的視野から検討し、3言語のデータ比較を通じて人間が意味を理解する仕組みの精緻化を目指した。3年間の総括を行うと共に、今後の課題についても検討することで、本研究課題の将来的展望を明らかにした。

#### 4. 研究成果

構成的な NPI の語彙の意味に関しては、その代表例として日本語の「誰も」を取り上げた。上述の Lahiri (1998) の分析、さらに「誰も」は NPI ではなく否定一致表現であるとする Watanabe (2004) の分析を検討し、「誰も」の構成的分析の可能性を探った。まず「も」の意味のうち何が NPI の意味にとって重要なのか」という設問に取り組んだ。ヒンディー語の *bhii* は、英語の *even* と同様に意外性を表すと言われているが、Lahiri (1998) はこの意外性の意味が NPI *ek bhii* の分布の制約の一因であると主張する。日本語の「も」も同様に意外性の意味を表し得るが（例えば「猿も木から落ちる」）、「も」の他にも意外性を表すとらたて詞が存在する（「まで・すら・さえ」）。しかし NPI の構成部分となり得るのは「も」のみであり、意外性の意味を持つだけでは NPI の構成部分にはなれない、つまり意外性の意味は NPI の十分条件ではないことが伺える。さらに「構成的な NPI は必ず意外性の意味を表す構成部分を持つのか」という問題も生じる。Haspelmath (1997) は、構成的な NPI の例を 17 の言語から提示しているが、このうち意外性の *even* に対応する部分を持つのは 5 言語に留まり、残りの言語は累加の *also* に対応する部分を持つ。このデータが正確であれば、意外性の意味は NPI の必要条件ではないということになる。しかし、どの言語においても構成的な NPI は意外性、もしくは意外性に関連した意味（この場合、累加の意味）を表す部分を持つようであり、NPI の分析には意外性や累加の表現の分析が必要であると言える。この問いに取り組むために、英語の *also / even* と日本語の「も・まで・すら・さえ」に加えて、ドイツ語の *auch nur* の分析を行った。*auch nur* は *even* と同じ意外性の意味を持つが、*auch* (= *also*) と *nur* (= *only*) という構成部分を持つ点で *even* とは異なる。このように、意外

性の意味を持つ表現も NPI と同様に言語によって構成性に差がある。この差に留意しつつ、すべての言語の NPI に共通する意味が存在するのか、またその意味は特定の構成要素に結びついているのかという問題をさらに検討した。

この成果をもとに、構成的な NPI と非構成的な NPI を比較した。まず、*any* のような非構成的な NPI にも構成的な分析を用いるべきかという問いに取り組んだ。*any* には内在的に *even* の意味が存在するという分析があり、それによると *any* は *even a single* に置き換えることができる。しかし、この2つの表現は異なる特徴を持つことが指摘されており、よって単純に構成的分析を用いることはできないと言える。しかしその一方で、*any* が強調された場合は *even a single* と同じ振る舞いをすることも指摘されている。そうすると「*any* のように形態的に構成部分がなければ構成的分析を用いることはできない」とは単純に結論づけられないことになる。また「*even a single* のように形態的に構成部分があれば構成的分析を用いねばならない」という結論にも問題があることが明らかになった。形態的に構成部分を持つことと意味的に構成部分を持つことの関連性、さらに構成性の原理における言語表現の「部分」とはどういう性質のものを指すのかを詳細に検討することができた。

NPI に関しては数多くの先行研究があるが、上述の2つの課題に関しては未だ明確な答えが出ていない。とりわけ「NPI に存在する部分の意味の普遍性」及び「NPI に存在する部分の意味と形態的構成部分の関係」に重点を置いた理論的研究は皆無に等しい。本研究は、構成性に関して重要な違いを持つ英語、日本語、ドイツ語のデータを比較することで以上の問いに取り組んでおり、NPI の研究に重要な貢献ができたことを確信する。

さらに、本研究は NPI という一言語現象の研究に留まらず、NPI を介して構成性の原理の普遍的性質解明を目標とした。上述のように、研究代表者はこれまでに分離構文の分析を行ったが、分離構文では構成部分が結合する際に構成性の原理が（一見）遵守されておらず、よってこの原理の性質を探る上で重要な役割を果たすことがわかった。構成性の原理の性質解明という目的のもとに、一見無関係に見える NPI と分離構文を関連した言語現象としてとらえ直すことで、どちらかの現象のみからは得られない新しい発見ができた。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Nakanishi, Kimiko. 2012. The scope of *even*

and quantifier raising. *Natural Language Semantics* 20:2, 115-136.  
<http://link.springer.com/article/10.1007%2Fs11050-011-9077-7>  
DOI: 10.1007/s11050-011-9077-7

〔学会発表〕(計 3 件)

(1) Nakanishi, Kimiko. Measurement in the Nominal and Verbal Domains. Workshop on Classifiers and Mass/Count Distinction. 星陵会館. 2013年2月21日.

(2) Nakanishi, Kimiko. Measure Phrases and Gradable Predicates in Japanese. 意味論研究会. 関西学院大学. 2012年2月10日.

(3) Nakanishi, Kimiko. Measure Phrases and Gradable Predicates in Japanese. 福岡大学言語学コロキウム. 福岡大学. 2011年9月2日.

〔図書〕(計 1 件)

Nakanishi, Kimiko. To appear. Focus, numerals, and negative polarity items in Japanese. In M. Kanazawa and C. Tancredi eds., *Cross-Linguistic Focus Across the Grammar* (provisional). (ページ数未定)  
Amsterdam: John Benjamins.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中西 公子 (NAKANISHI, Kimiko)  
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授  
研究者番号: 30598751

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし